

『歴史科学』197号

大阪歴史科学協議会

2009年5月（抜刷）

日本近現代都市史研究は都市空間をどう論じるか？

—水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著『モダン都市の系譜』の書評を通じて—

能川 泰治

日本近現代都市史研究は都市空間をどう論じるか？

—水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著『モダン都市の系譜』の書評を通じて—

能川泰治

はじめに

—本書を取り上げる趣旨—

日本近現代都市史研究（以下都市史研究と略記する）において最

近関心を集めている論点の一つに、都市空間をどう論じるかという問題がある。ここではその問題について研究史を整理することは省略するが、都市史研究に取り組んでいる研究者がまず自覚せねばならぬことは、都市空間に関する研究の進捗状況については、同じ日本都市史研究の中でも、前近代史研究と近現代史研究との間に著しい格差があるという点であろう。前近代史においては、一九九〇年代に歴史学と建築学や地理学との学際的な共同研究の成果が既に公刊されるに至っているが⁽¹⁾、近現代史においてはそのような研究成果があげられる段階には到達していない。もちろん、学際的な成果が全くないわけではないが⁽²⁾、前近代史と同等の水準に達するためには、まず隣接諸科学との対話を必要とする状況にあると思う。その隣接諸科学との対話に関して、このほど地理学と歴史学との対話のきっかけとなりそうな成果が上梓された。本稿の副題にあげた著書がそれである。本稿では、その書評を通じて、都市空間に関する研究を進展させるには、地理学と歴史学はどのような論点をめ

ぐって対話を進めるべきなのかを考えてみたい。

—本書の内容紹介

評者の方からあらためて紹介するまでもないが、本書の著者はいずれも地理学を専攻しており、これまですぐれた研究業績を積み上げてきている。それでは、本書の中では著者たちの研究成果がどのようにまとめられているか、本書の内容を要約的に紹介しておこう。

（1）本書の主題と著者の問題関心

まず、本書の主題と著者の問題関心を確認しておきたい。序章の記述によれば、本書の主題は、地図を読み込んでフィールドワークに出たときの視角を養うこと、即ち読図にあるという。その際、都市史研究の成果をふまえ、「誰が、何のために、そしてどのように都市空間を構築するのか」という問いを常に喚起し、「都市空間を生産する諸力」が解析できるよう配慮されていることが、序章で明記されている（四頁）。これらの点から、本書の基本的性格は、地図の解説と現場の観察に必要な眼力を養うことを重視した、都市空間を分析するための入門書であると言えよう。

さらに、序章では明記されていない、もう一つの主題があること

についてふれておきたい。あとがきに「都市周縁部のインナーリングに着目してモダン都市の系譜を地図から読み解こう」とするのが本書のもともとの発想であると記されている（三三三頁）ようだ。本書ではインナーリングから発信する都市論の構築が目指されている。ここでいうインナーリングとは、本書の六一～六三頁に最もまとまった記述があるが、「城下町」「オールドシティを取り囲むように同心円的に形成された最初のエリア」、言い換えれば、明治後期以降に無秩序な市街地化が進展し、都市問題が最も典型的にあらわれるようになった地域のことを指している。注目すべきは、このインナーリングから発信する都市論という発想は、シカゴ学派のパークやバージェスによって構築された、同心円構造モデルを理論的バックボーンとしている点である。つまり、今ではシカゴ学派の同心円構造モデルは、都市のポストモダンに注目するロサンゼルス学派によって旧時代の遺物と見做されているが、それに対しても著者は、インナーリングを足場とする都市論を構築し、同心円構造モデルは大阪のインナーリングを考える際に有効であることを示すことで、ポストモダン都市論が幅を利かせている研究状況の脱構築を目指しているのである。

（2）都市空間の変遷に関する枠組み

次に、本書の内容構成を簡単にまとめておこう。まず、インナーリング形成の前提として、近世城下町とその周縁社会としての新地・遊郭・墓所・刑場・非人小屋・木賃宿街などの存在が確認されたうえで（第一章）、明治期においては近代的都市計画法が未整備で施行権力が不在のまま工業化が進展し、空閑地処理と市街地改造がなされたため（第二章）、城下町の周縁部に無秩序な市街地化が進展

し、多様な貧困階層の集住地域と工場が混在するインナーリングが形成され（第三章）、さらにインナーリングの外縁部には職住分離と新たな消費生活様式を選択した市民が暮らすアウターリングが形成されるようになり（第四章）、そのような状況と前後して、都市計画法にもとづく土地区画整理のような計画的都市開発と、都市問題に対する社会政策的対応が始められるようになる（第五章）といふ。おそらく、ここまで叙述が、モダン都市の形成過程とその空間構造の在り方を提示したものであろう。そして、都市計画法の下で始められた計画的都市開発は、戦時下の都市計画の下で強権的に画一化を促すものとなり、戦後の戦災復興事業を経て（第七、八章）、インナーリングにおける住宅改良事業が進行し（第九章）、郊外においては近隣住区理論にもとづく公団・団地や大規模なニュータウンの開発が進められ、さらに旧市街地と木造密集住宅エリアの再開発も進められるようになるとされている（第十章）。以上、第七章から八章までの叙述の中に、著者たちが考える現代都市の空間構造と開発の在り方があぶり出されている。

二 本書の特色と意義

それでは、以上のように本書の内容をふまえたうえで、本書の特色と意義について特筆すべき点をいくつか挙げておこう。

まず、本書は内容構成の充実した都市形成に関する通史であることを確認する必要がある。幕末維新时期から現在に至るまでの都市空間構造の変遷が明示されていることは既に述べたが、その叙述は大阪の空間構造分析のみならず、京都・神戸といった関西の大都市や、和歌山・姫路などの地方都市の事例も豊富に盛り込まれており、比

較が可能な叙述になっている。さらに特筆すべきは、本論全体の四割が戦時期以後の叙述で占められている点である。おそらく、現在の都市史研究の水準では、現代の叙述にこれだけの比重を置いた都市空間の通史を描くことは困難であろう。本書を読んだ直後、例えば、戦災復興事業や戦後の住宅改良問題、そして戦後の釜ヶ崎など、戦中・戦後に關する研究が都市史研究では立ち遅れていることを、筆者は痛感せざるを得なかつた。

次に確認すべきことは、本書は地図という非文献資料を駆使した通史でもあるという点である。本書では都市全体を鳥の眼で俯瞰した分布図や、特定地域をクローズアップした図・写真など、実に様々な倍率の地図が駆使されている。また、都市空間の具体相に関する想像力をかき立てるための手だてとして、当時の市街地の様子を語る言説史料が適宜用いられており、さらに各時代の特記事項に関しては、各章ごとに読み切りの特論が用意されている。こうした工夫のおかげで、行政上の市域とは必ずしも一致しない、実態としての市街地がどのように分布し、時代と共にどう変化しているのかがリアルに伝わってくる。言い換れば、文献史料だけでは把握が難しい都市化という現象の多様な側面を、本書は具体的かつ動態的に把握していると言えよう。

最後にインナーリングという視角についてもふれておきたい。この点について、さらに注目しておきたいのは、本書では最後の第十一章でバブル経済崩壊以後の都市再開発にも言及しており、その中で「インナーリングの多様な再興なくして大阪の未来は語れない」(三三六頁)と、インナーリングの再興こそが都市を再生させるのに必要であると示唆している点である。これらのことから、インナー

リングから発信する都市論という課題設定は、インナーリングに居住する多様な貧困階層にとって、今日に至るまでの都市開発は何であったのかを問い合わせ、そこから各地域が抱える課題に提言しようとする、きわめて実践的な問題意識に裏打ちされたものであることがわかる。以上のように、都市下層社会にとっての都市開発の意味を問い合わせ、そのうえでよりよい地域再生のあり方を提言しようとする著者の姿勢に、評者は大いに共感している。

三 本書の主題と内容をめぐる論点

しかし、評者は本書の内容に関して何の疑問も抱かなかつたわけではない。いくつか感じた疑問点・問題点のうち、地理学と歴史学との対話を深めるうえで重要と思われる論点を挙げておこう。

(1) 研究動向と本書のスタンスをめぐって

序章では、本書は都市史研究の「成果をふまえ」ており、地理学と都市史研究との間には、分節化された地域や空間を基礎に論が展開しているところに「親和性」がある(三百頁)としているが、著者は本当にそう考えているのであろうか。本論を読むと、都市史研究の成果をふまえているというよりも、むしろ、各著者がこれまで積み上げてきた叙述スタイルで都市空間が述べられているように思えてならない。また、特定の地域を分節化して論じる場合に、都市史研究における地域区分の方法がふまえられているわけでもない。無理をして都市史研究の成果をふまえているかのように裝うよりも、都市史研究の到達点と課題について地理学はどうみているのかを率直に述べた方が、双方の対話を深めるうえで生産的な議論につながったのではないか。

さらに、著者たちが「ポストモダン都市論や東京論が幅を利かす」(五頁)状況を好ましく考えていないことはわかるが、ここで批判の対象になっているポストモダン都市論や東京論とは、誰のどのような研究を指しているのか。それらの議論のいかなる点に問題があると考えているのか。インナーリングに着目することの重要性を詳しく伝えるためにも、もっと言及する必要があったのではないか。総じて、本書は主題を明記しているものの、批判の対象が曖昧にされているが故に、著者の問題意識を明確に伝えられないよう思つ。

(2) 本書の基本的性格（読図を主題とする入門書）をめぐつて

全般的な感想を先に述べると、読図を主題とする入門書でありながら、地図に関する資料論と方法論が明示されていないのが惜しまれる。本書では多様な地図が使われているが、それぞれがどのような性格のもので、どう扱うべきなのかということにも言及すべきではなかつたか。また、このことと関連して評者が強く感じたことは、作図の過程が知りたいということである。本書に提示された地図の中には、著者によって新たに作図されたものが多く用いられているが、それらはどのようにデータを収集・整理し、どのように作図したのであるか。著者オリジナルの地図が完成するまでのプロセスについての言及がほしかった。本書が入門書であることを考慮すれば、作図方法に関する記述は不可欠なのではないか。

(3) 本書の内容に関する批判的コメント

① 「誰が、何のために、そしてどのように都市空間を構築するのか」をめぐつて

全般的な感想を先に述べると、序章で表明されていた右のような

問い合わせ、本当に喚起されているかどうか、少々疑問が残る。評者がそう感じた理由は二つある。まず、地図の取り上げ方について。この地図から何を読み取ればいいのかわからない、言い換えれば、この地図をどう読めば本文にあるような説明が導き出せるのかわからぬ箇所がいくつかある（例えば、二五二～二五四頁の図九・七・八、一八四頁の図一〇・七）。したがつて、序章で表明された地図解説の姿勢が一貫しているとは言い難い。次に、右のような問い合わせた場合、都市計画に関する評価が重要な論点になると思うが、この点については疑問視せざるを得ない叙述が少なくなかつた。いくつか具体的な問題点を挙げておこう。

本書では、明治から大正末にかけての時期を、都市計画の「暗黒時代」と位置づけている（五八頁）が、その評価は妥当であろうか。本書の理解を簡略にまとめてみると、「施行権力と法制度が欠如しているが故に自然発生的市街地形成」と捉えているようだが、それでは当該期の市街地形成や執行権力の性格を説明したことにはならない。その点に関連して気になるのは、著者にも一定の研究蓄積があるはずの、一八八六年の市区改正にふれていない点である。従来の研究成果によれば、府の知事・警察部長による立案、警察の権限強化、貧街移転計画の頓挫による貧民集住地域の拡散等の諸事実が指摘されているが⁽³⁾、そうした点をふまえると、本書の「暗黒時代」という評価はあまりにも短絡的である。

また、本書では都市計画構想はきちんと読み込んでいるであろうか。第五章の叙述は、どちらかと言えば都市計画区域に論点が絞られているが、誰がどのようなヒト・モノの移動ルートを作ろうとしているのか等の点についても言及するべきではなかつたか。また、

最近の都市史研究では、日中戦争勃発以前から都市の分散主義と衛星都市育成が模索されていたことが既に指摘されている⁽⁴⁾ことを想起するならば、日中戦争の勃発によって都市集中から都市分散へ方向転換されたかのように述べる（一八五頁）のも誤りである。

②インナーリングの論し方に關する若干の疑問

インナーリングから都市論を發信するという姿勢に評者が共感していることは既に述べたが、ではインナーリングに関する具体的な叙述の全てに納得できるのかと言うと、それは別問題である。一般的な感想を先に述べると、言及されてしかるべき重要な問題領域があえて捨象されているように思う。無い物ねだりになるのを承知のうえでいくつか挙げると、本書ではインナーリングが都心部と切り離されて論じられているし、土地所有、地価と家賃、労働市場など市場経済や資本主義の発展を考えるうえで重要な要素が、議論に全く組み込まれていない。さらに不可解なのは、先に述べたコメントと若干重なるが、著者に一定の研究蓄積があるはずなのに、論じられていない問題領域がいくつかあるという点である。

例えば、日本橋地域における明治中後期の貧街移転問題や昭和初期における不良住宅改良事業等々については、著者に一定の研究蓄積があるはずなのに⁽⁵⁾、あまり言及していないのが不可解である。

都市史研究も含めて多くの研究が積み重ねられてきた当該地域についての言及が乏しいが故に、当該地域の位置付けやスラムクリアランスについての評価が不明瞭になっている。本書の主題を想起するならば、特にスラムクリアランスについて言及していないのは、あまりにも大きな欠落と言わざるを得ない。

さらに、日本橋地域の位置づけが不明瞭になつたことと関わるが、

金ヶ崎の形成史が特論で要約的にしか述べられていないのも惜しまれる。例えば、現在の大坂が直面している野宿生活者問題に関して、「インナーリングの市民もまた、公園に野宿する生活者（ただし「あいりん地域」を除く地域である）の排除を都市政府に訴えた」（三三四頁）とあるが、なぜそうなるのか。このことは同じインナーリングを構成する諸地域の中でも、「あいりん地域」とその他の地域とは存在形態が異なること、そして「あいりん地域」はインナーリングの中でもさらに排除されている地域であることを意味するのではないか。そうであるとすれば、そのような問題の歴史的系譜は何か。本書の叙述は、このような問いには答えてくれない。

③現代都市をどう考えるのか？

戦災復興事業に関して「現代都市建設への確固たる基盤」（一一九頁）『現代的』な都市景観（一二〇頁）とあるが、第三部のモダン都市に関する叙述に比して、第四部は現代都市の空間構造が明示されているとは思えない。六三頁で示された昭和初期の同心円状の都市空間構造は、高度経済成長期においてどのような姿に変わるのか。図式化されたモデルは提示できるのであろうか。そもそも現代都市とはどのような空間構造をもつ都市なのであろうか。

おわりに－地理学と歴史学との対話の方向性をめぐって－

以下、本稿をしめくくるにあたって、都市空間をどう論じるべきか、地理学と歴史学は何をめぐって対話すべきかという、本稿の冒頭に掲げた論題について、本書を読みながら考えたことをまとめおきたい。

まず、地図の扱い方をめぐって。本書のタイトルの副題には「地

図から読み解く社会と空間」とあるが、この作業は地理学だけの専売特許ではない。都市史研究にとっても重要な作業である。本稿では、地図の扱い方について批判的にコメントすることに力を入れたが、読図の手法について本書から学ぶことは多い。都市史研究の方でも、文献史料から読み取ったことの裏付けとして地図を援用するだけではなく、地図から空間構造や社会状況を読み取ろうとしたり、収集したデータの集計結果を地図に表して都市の全体的広がりを確認する手法を活用することは、都市史研究の中で議論されてきたことを深めるうえで有効であろう。

その際に留意すべきことは、地図から社会はどのように読み取れるのかという点である。先にふれたように、本書の副題には地図から社会と空間を読むと明記されているが、本書によって社会はどこまで解説されたであろうか。この点については、評者は判断を保留しておきたい。ただし、近代・現代という時代はそれぞれどのような時代なのか、そして時代の変遷に伴って社会がどのような状況にあったのかという問題については、歴史学に膨大な議論の蓄積がある。むしろ、地図から社会や時代を解説するための視角と方法については、歴史学の方が積極的に提言できる位置にあるかもしれない。近代都市（現代都市）とはどのような都市なのか、近代（現代）とはどのような時代なのかという、より根源的な論題についても、もっと意見交換する必要がある。

次に、それぞれの立場からお互いの成果や手法について批評しあうだけでなく、具体的な共同研究を発足させることも必要なのではないか。その際留意すべきことは、その共同作業が都市の全体像を構築するためには、他の隣接諸科学との対話も不可欠という点であ

る。例えば、本書では様々な住宅が紹介されていたが、その住宅の実態についての具体像を明らかにしようと思えば、建築学の成果から学ぶ必要がある。そうすれば、住民の日常生活まで視野に入れた総合的な共同研究が可能になるはずである。本書が目指した、インナーリングから発信する都市論という研究課題は、学際的な共同研究を立ち上げるうえで格好のテーマでもあるよう思う。

註

(1) 例えば、高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門－空間』（東京大学出版会、一九八九年）、高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集日本都市史』（東京大学出版会、一九九三年）など。

(2) ごく最近のものだけについて紹介すると、中野隆生編『都市空間の社会史 日本とフランス』（山川出版社、二〇〇四）及び同上編『都市空間と民衆 日本とフランス』（山川出版社、二〇〇六年）は、日仏比較という視点を取り入れながら近年の研究動向を総括し、内容の豊富な個別研究を盛り込んだ、日仏都市史の共同研究として注目される。

(3) 原田敬一『日本近代都市史研究』（思文閣出版、一九九七年）、加藤政洋『大阪のスラムと盛り場』（創元社、二〇〇一年）など。

(4) 高岡裕之『都市大阪の空間的拡大と都市計画』（前掲『都市空間と民衆』所収）。たとえば、水内俊雄「戦前大都市における貧困階層の過密居住地区とその居住環境整備事業」（『人文地理』三六巻四号、一九八四年）、加藤政洋前掲著など。

(5) カニシヤ出版、一〇〇八年五月、A5判、三三五頁、価格二八〇〇円＋税)